木曽林務課だより　1月

今季最強の寒波の中、南木曽町の大原採種園で、採種園管理技術研修会を実施しました。

採種園管理技術研修会で採種木の間伐を行いました

長野県内の多くの森林が、木材等に利用できる時代を迎え、森林の公益的機能を発揮させながら、持続的に利用していくには、森林を伐採した後に成長、形質ともに優れた苗木を植栽していくことが必要です。優れた苗木の植栽は、CO_2の吸収源対策としても重要です。これらの苗木は、主に県内にある8箇所の採種園で採種された種子から生産され、木曽管内には南木曽町にヒノキの採種園である「大原採種園」で採種されています。

現在、県内の採種園には、より良質の種子を安定的に供給するための採種木の植え替えや新たな採種園の造成等が行われています。採種園では、球果をつけやすく取りやすくしておくための断幹や剪定などの他、採種木の配置を最終の状況にしていくために間伐を行います。

平成17年に採種木を植え替えて改良した「大原採種園」では、採種木がしっかり育ち、間伐を実施する時期を迎えました。

採種木の間伐作業等の技術を継承し、適切な管理を行うため、林業総合センターと協力して、県内の林務職員を対象とした技術研修会を行いました。

参加者は、「大原採種園」に集合し、林業総合センター研究員等から、採種園の間伐に係る採種木の配置や、間伐の必要性、実施上の注意事項等の講義を受けた後、作業を行いました。

講義の様子

間伐作業実習

採種木は、健全で採種しやすい樹形に誘導するため断幹等が行われているため、通常の林木とは異なり、木の重心が低く、下枝がびっしりある樹形です。そのため、間伐の際も、残す採種木の枝を折らないように、下枝を先に切り落として、狙った方向に伐り倒すことが重要です。

参加した職員は、林業総合センター技術専門員などから指導を受けつつ、重心が低い採種木と通常の林木の違いをしっかり感じながら、残存させる採種木を傷つけないように丁寧に間伐を行いました。

森林の持続的な公益的機能の発揮のため、こうした技術や知識を学ぶ取り組みを今後も続けていきたいと思います。

©長野県木曽地域振興局林務課　令和5年1月26日